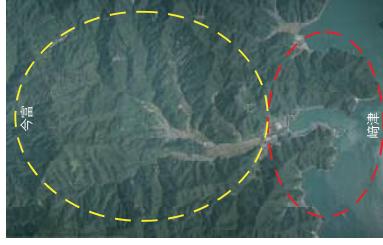


&lt;&lt;選定範囲&gt;&gt;

「天草市崎津・今富の文化的景観」  
平成24年9月 今富を追加選定・名称変更「天草市崎津の漁村景観」  
平成23年2月 重要文化的景観選定

平成21年4月 天草市景観計画制定

平成19年2月 文化的景観事業着手



▲崎津・今富航空写真

天草市河浦町富津は天草下島の南西部、東シナ海に開口する半角湾北岸に位置する。半角湾には海食輪廻による小湾が数多く形成され、半角湾最奥の深い湾の入り口にあたるのが崎津・今富地区である。入り江に面する崎津は、金比羅山と海に接する険しい土地に集落を形成し、入り江の最奥にあたる今富は、今富川の2つの支流と、後背山に囲まれた坦地形に集落が点在する。富津は明治29年、崎津村・今富村の合併により誕生したが、古来より崎津・今富は「崎津浦」という一体の景観として捉えられており、漁村の崎津と農・山村の今富は互いに補完しあうことで生活を営んできた。

当地区では平成19年より文化的景観選定に向け調査を開始し、平成23年2月には崎津が「天草市崎津の漁村景観」として選定、平成24年9月には今富を選定範囲に加え名称変更を行い、国的重要文化的景観に選定された「天草市崎津・今富の文化的景観」が誕生した。

## 崎津と今富へ土地利用の変遷へ

崎津は漁業集落特有の密集集落、今富は造地形に當まれた農業集落という狭い土地のなかで、両集落共に効率良く生活を営むため、土地利用の工夫を行ってきた。その中でも当地では①海岸線の拡張、②崎津の「トウヤとカケ」③今富の「干拓事業」という構成要素が景観や歴史と結びつくことで文化的景観を形成している。

### 海岸の拡張

崎津は山と海に接する険しい土地に集落を形成したため、現在に至るまで海岸を拡張し居住地を拡大してきたといふ。拡張以前の旧護岸を確認するため、確認調査を行ったが江戸時代の護岸を確認することは出来なかつた。掘削箇所の土層は土砂と礫が混在し、自然石（山石）や丸石（浜石）の集積もみられ、現在築造されている護岸の裏込め材として埋められたものと思われる。

一方、整地層は海岸から10mほどで急激に立ち上がる。これが現在の地割りとほぼ一致し、聞き取り調査では約1世紀前までは教金前の道までが海であったといふ。立ち上がり面には石を張つた痕跡は無く、捨石構造でもないため、当時は自然地形を利用した護岸であつたと思われる。



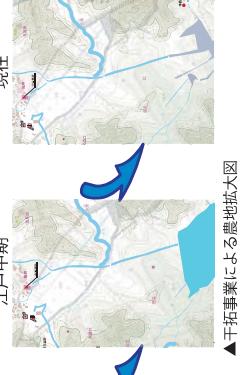
▲確認調査による海岸線（護岸の裏込め）

現在  
▲海岸線の変化

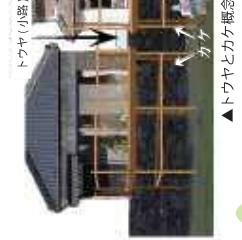
### 崎 津

#### トウヤとカケ

「トウヤ」は軒と軒に接まれ形成し海へと続く「小路」のことと、「せどや」や「せどわ」とも呼ばれる。トウヤの先にはカケに通じているものが多く、セット関係として捉えられる。一方の「カケ」とは護岸から海に突き出た構造物で、船舶の碇泊や干物作り、漁具の手入れ、物干し場など崎津の漁業集落特有のものである。庭を持たず、狭い土地に密集して生活していく上の生活空間の一つとして作り出された。構築材などは今富地区で採れたシラカバなどを用いており両集落の共同が見受けられる。



▲選定に至る経緯



▲干拓事業による農地拡大図

### 今 富

#### トウヤとカケ概念図

今富では、後背山の織り成す複雑な地形の中で農業を行ってきたが、江戸時代中期以降の干拓により農地を拡大し、水稻耕作を中心とした生産体系を確立した。享保17年(1732)の「大江組明細帳」内に新田開発の記録があり、年貢等の「津出」場、「是郷戸ヨリ船場迄法拾町」とあるようによく今富に荷下ろし港があつたと伝える。安永元年(1772)には「干潟〆切場」という記録から、干拓地を拡大していたことがわかる。聞き取り調査では、干拓地周辺では塩害も多くあつたと伝え、船着場は干拓地先端の志茂地区にあつたという。干潟を開発することで集落経営を作り立たせ崎津との共同体としての要素を形成していく。



### 崎 津

#### 海岸の拡張

崎津は現在に至るまで海岸を拡張し居住地を確認するため、確認調査を行つたが江戸時代の護岸を確認することは出来なかつた。掘削箇所の土層は土砂と礫が混在し、自然石（山石）や丸石（浜石）の集積もみられ、現在築造されている護岸の裏込め材として埋められたものと思われる。

一方、整地層は海岸から10mほどで急激に立ち上がる。これが現在の地割りとほぼ一致し、聞き取り調査では約1世紀前までは教金前の道までが海であったといふ。立ち上がり面には石を張つた痕跡は無く、捨石構造でもないため、当時は自然地形を利用した護岸であつたと思われる。



▲確認調査による海岸線（護岸の裏込め）

現在  
▲海岸線の変化

### 崎 津

#### 海岸の拡張

崎津は現在に至るまで海岸を拡張し居住地を確認するため、確認調査を行つたが江戸時代の護岸を確認することは出来なかつた。掘削箇所の土層は土砂と礫が混在し、自然石（山石）や丸石（浜石）の集積もみられ、現在築造されている護岸の裏込め材として埋められたものと思われる。

一方、整地層は海岸から10mほどで急激に立ち上がる。これが現在の地割りとほぼ一致し、聞き取り調査では約1世紀前までは教金前の道までが海であったといふ。立ち上がり面には石を張つた痕跡は無く、捨石構造でもないため、当時は自然地形を利用した護岸であつたと思われる。



▲確認調査による海岸線（護岸の裏込め）

現在  
▲海岸線の変化